

『古書カフェすみれ屋と本のソムリエ』

里見 蘭／著 大和書房（2016年）

古書カフェすみれ屋は、奥の空間が古書店です。古書担当の^{かみの}神野は、その人が本当に必要とする本を見極める能力に長けています。

この本には5話が収録されていて、最初の物語では、ある恋人たちが神野にすすめられた本を読むことによって自らのすすむ道に気づきます。どの物語にも名著が登場し、登場人物たちが大切なことに気づくきっかけとなっていきます。そして、カフェが舞台ならではの美味しそうな料理も楽しむことができます。

『司書のお仕事 お探しの本は何ですか？』

大橋 崇行／著 勉誠出版（2018年）

^{いなみふたば}稲嶺双葉はこの春から味岡市立図書館に就職した新人司書。ある日、館長が隠していた大量の古い寄贈本が見つかった！双葉とクールな先輩司書の^{やましたあさみ}山下麻美は手分けしてその本を整理して図書館で受け入れることに。膨大な作業をしているとボロボロの本の間から古びた封筒が出てきた。中身は……暗号？解説するとどうやら内容はラブレターらしい。一体だれが？なんのために？謎を解き明かすため2人は^{ほんそう}奔走する！



『舟を編む』

三浦 しをん／著 光文社（2011年）

この本は「大渡海」という辞書を玄武書房編集部が15年の歳月を費やし作りあげていくというお話です。営業部から抜擢された^{まじめみつや}馬締光也は、名前のおり真面目だが、言葉を紡いでいく才能があり、辞書作りには秀でていました。そんな馬締に嫉妬する同僚の西岡。会社人生を辞書作りに一筋、定年を間近に控えた編集者荒木。そして日本語研究に人生を捧げてきた松本先生。辞書作りに携わる人々の人間模様を織り交ぜながら完成を迎えます。



『図書室で暮らしたい』

辻村 深月／著 講談社（2015年）

この本は、直木賞を受賞した作家である辻村深月さんが、日常のことや、自身が影響を受けた作品、自らの青春時代をみずみずしい感性で語っています。辻村さんの作品が好きな方、辻村さんの作品は読んだことがなくともアニメや小説や漫画が好きな方は、共感を覚えたり、新しい発見がありますよ。短編小説も収録されています。



『本をめぐる物語 小説よ、永遠に』

神永 学(他)／著 KADOKAWA（2015年）

^{のむとこうすけ}野本耕介は、友達がおらず、学校では空気のように扱われ、家では両親のけんかの当て馬にされる毎日を過ごしていました。ある放課後、帰宅したくなくて校内を歩き回っていた耕介は、偶然立ち寄った学校併設の図書館で、冬美という美しい少女に出会います。冬美は本の虫で、耕介にいろんな小説を教えてください。冬美のことが好きだと気づき始めた頃、見知らぬ上級生から「彼女に近づかないほうがいい。」と忠告を受けます。

（『真夜中の図書館』／神永学 // 著）

『高校図書館デイズ』

生徒と司書の本をめぐる語らい』

成田 康子／著 筑摩書房（2017年）

この本は札幌南高校で司書をしていた成田先生が図書館にくる生徒たちがどんな目的をもって、またはどういうふうに関わっていたのかを生徒に聞いたりご自身が感じたことをまとめて書いた本です。高校1年生から3年生は部活動や塾に忙しい日々を過ごしています。それでも「本を読みたい」、「本を読むと落ち着く」と本の中の言葉をたよりに前に進んでいます。たくさん本を紹介しているので、あなたを支える本に出合えるかもしれません。